

## 2 シニアネットの役割 ～シニアライフの楽しみと社会参加～

### シニアネットフォーラム21 in 四国での基調講演から（部分）

講演者：徳島大学解放実践センター 教授  
NPO法人いきいきネットとくしま 理事長 吉田敦也氏

#### 1. はじめに

地域ネットワーク「いきいきネットとくしま」の理事長として、地域のシニアの活躍を支えて行こうという活動をしています。今日の講演の中では実演を交えて皆が出来ることを一緒に考えてやってみよう、というような形式でお話しを進めて行きたいと思っています。

最近、Apple Computerの「iPod」が、若い人たちの間ではやっています。これはいわゆるウォークマンの一種です。この中にコンパクトフラッシュというデジカメなどで利用されているのと同じメモリーが入っています。メモリーの中に音楽応用ソフトと音楽データが入っており、4Gバイトのメモリーサイズで約1000曲の音楽を入れて聞くことが出来ます。特徴の一つには、車のFMラジオを利用して、カーステレオに早変わりするということがあります。このように、今やコンピュータはこうした小さい機器から、生活の中のいろいろな場面に組み込まれて利用されてきています。

もう一つの事例をお話しします。徳島大学ではユビキタス遍路というものを運営しています。これは四国霊場88ヶ所を遍路するときに、お遍路さんが携帯電話を持ち、ブログを利用して、いま何処にいるかとか、お参りしてどうだったか、歩いた歩数などをインターネットに送信しながらお遍路するというものです。これによって、留守家族に現在の状況が届き、家族はそれを見て安心し、自分は帰ってから旅を振りかえることができ、新聞社の人はそれを見ながら記事を書く、こういうことが出来る時代になってきました。まさにユビキタス社会がやって来ていると思っています。

このような事例からも若者だけでなくシニアの世界でも、先進技術は、私達の暮らしを豊かにし、自分の気持ちを穏やかにし、人と人との繋がりを強固なものにする、そういう働きがあるということです。今日の私の講演は、「シニアネットという枠組みの中で、あるいは集まりの中で、先進技術を



吉田敦也氏

を使いながら心豊かな暮らしを作って行こう、そういうことに参加をしよう」というのが本題であり、結論でもあります。

#### 2. シニアネットとは何か？

今日は、基本に立ち返って「シニアネット」というものを考えてみたいと思います。昨晚宿泊したホテルの前に見えた風光明媚な松山城を見ながら、思い起こしたのはサンフランシスコのベイエリアでの市民活動です。

シニアネットという言葉は、もともとアメリカの商標登録であり、スペルは「seniornet」です。シニアネットは、1986年にアメリカ西海岸のサンフランシスコで誕生しました。URLはseniornet.orgです。シニアネットに関するバイブルとも言うべき本が何冊もあり、中でも私が愛する本が2冊あります。

その1冊は、前回のシニアネットフォーラムの基調講演者である岡部一明氏の著書で「インターネット市民革命」というもので、もう一冊も同じ岡部氏の著書で「サンフランシスコ発社会変革NPO」です。この著書の言うところは、「インターネットというものを活用して、あるいはインターネットの登場により、市民が社会を作ってゆく一歩が切り開かれて、その一歩がまさにサンフラン

シスコから踏み出された」というものです。

行政はNPOに施策の提案を求め、それを実現する組織として行政があるという位置づけです。サンフランシスコの図書館で最も権限のある人は、行政側でなく利用者が作るNPOで、そのNPOの決定は行政側も覆せません。社会が地域住民によって自立的に作られてゆくということが書かれています。

アメリカのシニアネットは1986年に創設されたので、私は来年をシニアネット20周年と思っています。日本のシニアネット十数年の歴史の中で、その立ち上げと成長のためになされた支援を目に見えるものとして形に残し、次の第2ステップに向けてその礎を残してゆくべき記念の年にしたいと思っています。

ここに示したのが、seniornet.orgのホームページ(図1)で、オンラインコミュニティといわれるものを作っています。私が調査した、1991、2年に4万人の会員を抱えていましたが、今は10万人、あるいはもっといるかも知れません。ホームページに、シニアネットの使命が書かれています。「50歳以上のシニアが、生活をより豊かにし、長い人生の中で築き上げた知や知識を広く社会の中で共有できるようにするためのコンピュータ技術活用教育を提供する」機関であるというふうに位置づけをしています。即ち、シニアの暮らしを豊かにし、同時にシニアの持つ知恵を皆で共有する、それを情報技術で実現する、そのための教育を行う、その環境整備を行うことこそが、シニアネットの最大のミッションであると、冒頭に謳っています。



図1 seniornet.orgのHP(部分)

### 3. アメリカのシニアネットはなにをしているか?

アメリカのシニアネットは、その掲げたミッションから、先ず学習センターの整備を行っています。全米及び世界各地に教室240カ所を持っています。教室の規模としては、数席備えただけの小さなものから、教室一つを借り切った30~40席もの大きなものまであります。一つのネットで240カ所もの教室を運営するのは並大抵のことではありませんので、ここにシニアネットの強い意思がメッセージとして見えます。

学習センターは維持運営に金がかかり、そのため受講生から受講料を取るのは当然です。その上でここは、上手な運営の仕組みを持っています。学習センターで教える先生は、日本のシニアネットと同様にボランティアが中心ですが、マネジメント関連、教材の選定、会場の運営などはヘッドクォーターが行い、スタッフには通常の会社と同様に給与も支払います。その代わりスタッフは、寄付の目標額を集め、その財務管理・税務処理なども行い、日々の運営を行っています。非常に賢い仕組みです。

加えて、会員外も対象としたWebサイトの運営を行っています。そこは、オンラインコミュニティとかバーチャルコミュニティとも呼んでいるようです。それらを使って、色々な相談や悩みの交換、コミュニケーション、そして技術的な情報交換も行っています。

オンラインの活動にプラスして、ニューズレターという従来の紙媒体と同様のものを発行し、新しく参加してくる人達あるいはインターネットを使いづらい人とも情報交流を行っています。社会に対しても、さらにメディアに対しても情報共有を行うことが可能な仕組みです。

ウェブサイトに提供されている一番の話題は、当然技術の話題です。コンピュータを使うための内容が多いようです。メンターという言葉がありますが、メンターとは、コンピュータを伝道してゆく、相手の立場にたって教えてゆく、そういう事をリーダーシップの意識をもってやってゆける人たちのことをさしています。読書会、文化交流会、フィットネス、ヘルスプロモーション、定年後の年金での暮らし方、リクリエーション、アメリカでは必ず話題となるボランティア活動、シニアネットショップなどの運営も行っています。

会費は年額4~5千円位で、まとめて3年分を払うと安くなるという仕組みを作っています。組織の構築に関与した人や多額の寄付をした人にはそれなりのメリットがあるようです。

#### 4. 世界のシニアネットはどうか？

世界のシニアネットの状況はどうでしょうか。実際に訪問して調査することが出来ないのので、WEBサイトでの調査によるものです。

ニュージーランドでは、1992年にアメリカのシニアネットの立ち上げに同期した形で出来ています。100カ所の学習センターがあり、ニュージーランドテレコムが支援しています。オーストラリア、スウェーデン、ドイツなどにもシニアネットがあります。ぜひ各地を訪問し、現地の状況を調査して、アメリカのサンフランシスコで誕生したシニアネットが、どのように世界的に影響を与えているかなどを調べてみたいと思っています。

一方で、イギリスは、Learn Directなど就労のためのe-ラーニングが国家戦略で盛んなのにシニアネットはないようです。もしないとすれば、イギリスでは何かシニアネットに代わるものがあるのではないかと、そこから何か新しいヒントを得られるのではと考えています。

#### 5. 誰がシニアネットを作ったのか？

アメリカのシニアネットは、サンフランシスコ大学の教育学部教授で教育工学、つまり教授法とかメディア教育などを専門領域とするMary Furlong氏が立ち上げました。1983年に高齢者向けコンピュータ講座を開設し、1986年にシニアネット創設に至っています。Mary Furlong氏は、「コンピュータは心の自転車である。移動能力が少ない介護の必要な高齢者が、技術によって他の人達と繋がるのが大切」と言っています。

アメリカ社会にあっては、市民社会を支える色々な仕組みや考え方がありますが、その一つが情報共有でありその最大のあらわれがインターネットです。

もう一つは、情報の均等な配分です。誰もが、情報に均等にアクセスできる環境を作るというアクセサビリティの考え方です。「ハンディキャップのある人も、目の不自由な人も、耳の聞こえにくい人も、歩きにくい人も、若い人も、皆均等に情報を受け取ることが出来る。教育環境・学習環境を均等に与えられる」ということが活動の基本です。CIT（教授法と技術を扱うサンフランシスコ大学の専門機関）の、「私達は何をするか」というプログラムの中に、「CITはシニアネットを支える」ということをあげています。

つまり、サンフランシスコ大学は、シニアネットというNPOを支えるということ、ウェブサイトで宣言しています。創始者がここから出たからそれを尊重し、意志を継いでゆくということもあるでしょうが、こういう大学と地域との関わりがあって、言い換えれば、地域の大学や公共的な大学がシニアネットを支えるということが、シニアネットの権威付けと皆の信頼を得る材料になっています。

ここに、シリコンバレーラジオがMary Furlong氏へインタビューした記事があります。そこでの解説に、「シニアネットは、テクノロジーに少し気が引けている、腰が引けている人たち、使いにくいと感じているシニアの人たちに対して、入り口となるような役割を果たす」という表現をしています。

このようにアメリカ西海岸では、大学を中心にシニアネットが作られてきたという経緯は、国立大学法人に席を置く私としては心の支えとなっており、自分のやってきたことが間違いでない、皆さんのお役に立っているのだという言葉に貫つたような気持ちにさせてくれます。

#### 6. シニアネット創設の背景

Mary Furlong氏がシニアネットを作ることになった動機は、「時代の変化への対応」ということに結論づけられると思えます。

世の中の人口構成が大きく変わってきました。少子高齢化社会の到来ということです。少子化とは子供の数が少ないという状況です。WHO基準によると、特殊出生率2.08以下が少子化ということになっています。一人の女性が一生の間に生む子供の数が2.08人以下ということです。日本の現状はそれどころではありません。1.57ショックが1989年に記録されてから、さらに子供を生まない時代が日本にはおとずれています。

一方、同時に高齢化社会が来ています。高齢化には基本として3段階あります。高齢化率が、現人口に対して7～14%を高齢化社会、14～21%を高齡社会、21%以上を超高齡社会というような位置づけになっていて、日本は超高齡化社会に向けて突っ走っています。

高齢者というのは、WHOでは65歳以上としています。この点、日本は、シニアという言葉を手を使って使っています。厚生労働省的な意味と定年退職またその準備期間を含めて50才頃からをシニアと呼ぶのは、適当な言葉になっていると思います。

## 7. 地域社会とシニアネット

次に、地域社会におけるシニアネットの役割、シニアネットが自分達の地域に存在するメリット（なぜシニアネットなのか）についてお話をしたいと思います。「高齢化対策」はもちろんですが、私は二つのレベルに分けて考えてみました。

### (1) レベル1 情報通信技術 (ICT) へのアクセス (図2)

パソコンを利用した情報通信技術へのアクセスが、社会生活の全ての場面で有効であるということがわかってきました。しかしながら、その有効性を実感出来ない人が多数いるのも事実です。政府のIT講習会が強力に進められ、マウスの基本的使い方やワープロ入力等の講習会が多く各市町村で実施され、教育目標人数は達成されつつありますが、パソコン操作の基礎を習得したということと、インターネットを有効に活用できるということの間にはかなりの隔たりがあるものです。パソコンを使ってコミュニケーションをするということがもたらす効果・成果というものに、私たちの意識を置きなおす必要があります。

#### なぜシニアネットなのか(レベル1)

(基本的にゆるやか・おだやかな次元)

##### 情報通信技術 (ICT) へのアクセス

→情報共有 (知の共有)

→暮らしの形成

→社会参加 (電子手続・意思決定への参加)

→地域・社会の形成

→コミュニケーション (仲間づくり)

→楽しい日常、生きがいの発見

図2 なぜシニアネットなのか (レベル1)

#### ①情報共有

その一つが「情報共有」です。

まず第一に、「情報とは何か？」ということですが、情報は基本的には送る人と送られる人の間に何か動けばそれが情報です。私たちの暮らしに役立つ情報、暮らしの中で築かれた知恵や知識が動くということが情報と言えましょう。

そして次に、「情報共有とはどういうことか？」ということですが、これまでも暮らしの情報は向こう3軒両隣の間に交わされていました。つまり、情報共有していました。それが、インターネット時代になって、いろいろな地域から、しかも、行ったことがない、あるいは人生の中で行くことのない地域からの情報が集まってきて、それを自分

達の暮らしの中に取り入れるというようなことが起こってきたという事です。

#### ②社会参加

次は「社会参加」ということです。

政府は、既に「e-Japan戦略」を強力に推し進めており、今は「u-Japan戦略」に移りつつあります。e-Japan戦略の中で起こってきたのが電子自治体化等です。これにより公共サービスのトータルコストを下げるといった目的もありますが、障害を持つ人、移動し難い人、遠くにいる人に対して、より本目細かい行政サービスの実現があります。

ユニバーサルに誰もが情報機器そして社会の仕組みを使えるようにするのが、u-Japan戦略の要素です。そういうものにスムーズに参加してゆけるようにする準備を行うことが、シニアネットに課せられた社会機能としてあげられます。

今は、ワードやエクセルの講習を主にしているシニアネットPC講習会、そのうちに住民票の貰い方や、インターネットでの納税の仕方などによってゆく可能性が広がります。既に国税庁への確定申告がインターネットで行えるようになっていき、各地での電子入札も始まりました。シニア情報生活アドバイザー養成講座なども、そういう内容を追加してゆくことになると思います。

その先に見えてくるのがインターネットを介した意思決定への参加です。例えば、地域運営の会合などにおいて、当日は旅行で参加できないとか、毎回の会議に出られませんから、ネットを使って意思決定に参加するというのも増えてくるでしょう。そうなった時には、IT講習内容はまた変わってくるでしょう。住んでいる自治体へのインターネットを使った提案の仕方、知事へのメールの書き方などが、シニアネットの講習内容となるかもしれません。受講の意味もずいぶん変わってくるでしょう。今まで届かなかった声を届けるという要素もあるし、今まで参加できなかった地域の行政や街づくりなどに参加できるようになります。

逆に、そのような使いかたが出来ない場合に、デジタルデバインドという言葉によって行くことになり、使えない人は意思決定からはみ出してしまう、遅れてしまうということです。従ってそうならない様にするための役割を、シニアネットが果たしてゆくこととなります。そのための講習を県や市町村などがやるよりも、シニアネットが分かり易く、地域の目で手助けをする、そういう役割が重要になってきます。

#### ③コミュニケーション

3番目がコミュニケーション作りです。楽しい日常、生きがい発見に繋がるコミュニケーショ

ンを基本にしてゆくということです。このフォーラムに参加して実際にシニアネット活動しておられる皆さんは、コミュニケーションのすばらしさを実感しておられるのではないかと思います。

## (2) レベル2 ネットの積極活用 (図3)

さて、そういうシニアネットの社会的機能を、もう一步踏み出す時期に来ているというのが今日の私の一つの主張です。それはネットの積極活用です。もっとネットを積極的に利用して欲しい。もっと有効な活用の余地があるのではないかとということです。

### なぜシニアネットなのか(レベル2)

(発展的でアクティブ・クリエイティブな次元)

#### ネットの積極活用

- 情報化の促進(知や技能の可視化・伝承)
  - いきいき・ドキドキな暮らしの形成
  - ノウハウ・人材を共有した社会運営
- ビジネス参加・起業(流通の再編、多業種融合)
  - 社会通念を覆す生産・労働の創成
  - インパクトのあるリーダーシップの発掘
- ネットワークングへの接近
  - (違いを認め合ったひとりひとりの集まり)
  - (対面を超えるオンラインコミュニケーション)
  - ユビキタスライフ、人間社会拡張のICT活用
  - 異世代交流の活性化、よりスローライフの実現

図3 なぜシニアネットなのか (レベル2)

### ①情報化の促進

情報化という言葉は、だれでも知っています。ここに水のボトルがありデジカメがあるとします。これは一つの情報です。情報化とは、これをある目的を持って見えるようにするということです。今愛媛県松山の会場で演壇にたっている人の前に水があるというのがネットの中から見出せるというのが情報で、その水がエビアンであり、そのシリアルナンバーが何番でどこのロットから出てきたかということが統一的に分類されてゆくときに情報化が進むわけです。地域にある知識とか技能を積極的に皆に見えるようにする、そして次の世代にそれらを伝承していくというようなことも情報化です。事例として、徳島県吉野川に、伝統的な船が残っているとします。ところがその船作りの技術が失われようとしています。なぜかという、その船は特殊な作り方をしており、もう作り手がなくなっているとします。このことをネットで知らせ、皆で知恵を出し合い統合すれば、その船を作る技術を復活し、伝承することが出来るのではないかと。こういうことも情報化の一つだと思います。

つまり、「なんだ、こんなことだったのか」とい

う発見を促すような事例、「すごいな、こういうモノがあるんだな」という資料を積極的に集めて、パソコンのデスクトップを地域の博物館、生きたデータベースにすること。それを土台に、イキイキ・どきどき、ノウハウや人材を共有する社会運営の形にすることがこれからのシニアネットがやって行かなければならないと課題と思います。サンフランシスコ発の世界に学習センターを揃えただけに終わってしまったのでは、少しもの足りない結果になるのではないかと思います。

### ②ビジネス参加・起業

もう一つは、おそらく次のパネルディスカッションで、詳しい話も出ると思いますが、シニアネットのビジネスへの参加、あるいはコミュニティビジネスという地域に密着した特色あるビジネスを起こすということです。

社会通念を覆すような生産・労働の創生、他ではちょっと出来ないがシニアネットの土俵では出来るというものが、沢山あると思います。インパクトのあるリーダー・人材を育成し、他業種・異業種の融合等、もっと研ぎ澄まして、徹底的にすすめて行く必要があると思います。

### ③ネットワークングへの接近

その次がネットワークングへの接近ということです。慶応大学の金子教授がネットワークングとは、「違いを認め合った一人一人の集まり」と言っています。

言葉にすると簡単なフレーズですが、インターネットワールド、インターネットジェネレーションからすると輝かしい言葉です。違いを認めあうということは、互いの意見を尊重するという、互いの意見に耳を傾けるという理念であり、このことが出来ればインターネットはすばらしい機能を発揮することになります。

オフラインミーティングは多くの場合、シニアネットの中での楽しい集まり(飲み会)に終始してしまう可能性があります。それは悪いことではなく、そのことが出来る場がシニアネットの一つの役割でもあります。

しかし、折角インターネットを使うという賢者の知恵を持った集団なのでありますから、是非ともネットワークングへの接近ということを試みて貰いたいと思います。そこは、特化した情報技術者の集団ではなくて、世代交流や活性化を目指すよりスローライフな情報源になるということをおきます。

## 8. 日本のシニアネット

今までに「シニアネットとは？」について話してきました。私からのメッセージとして、こういう基本を考えた運営や参加を是非お願いしたいということです。モデルとなるようなシニアネットを、地域の中にキチンと育て、その上でいろいろなバリエーションがあってよいのではないかと思います。

情報リテラシーの普及も必要です。昨今ではウイルスとか、インターネットからの不正なアクセス・攻撃が絶えません。皆さんのご家庭にもウイルスは飛んでくるし、メールだけでなく接続するだけで感染をしたり、パソコンがやられたりすることがあります。そういう時代の中では、基本的に正しく備えることが重要です。インターネットセキュリティの基本を学ぶというよりは、ネットワークとはなにか？という、大きな枠組みを認識することです。インターネットの仕組みは限りなく論理の世界です。地域の中で基本をキチンとやっていくシニアネットを構築することが重要です。

日本で、以上のようなことを踏まえて長年ご苦労をされておられるのが、今日の主催者である財団法人ニューメディア開発協会（NMDA）です。1990年ごろ、当時の通商産業省が提唱した「メロウ・ソサエティ構想」は、「高齢化時代の到来を予測して、元気な高齢者に情報技術を活用してもらい、より成熟した円熟した社会を作ろう」というところから始まっています。日本のシニアネットの草分けとして、「メロウ倶楽部」のホームページ（図4）を例にあげさせてもらいました。おかげさまで、今ではいろいろなシニアネットが育ちました。シニアネットの数は、NMDAに申請登録されたもので、全国で90～100位ありますが、実際にはおそらくこの倍も3倍もある筈です。中四国では「シルバー高知」と



図4 日本のシニアネットの草分け（メロウ倶楽部）

「いきいきネットとくしま」ですが、それ以外にもっとたくさんあるはずで。 「ぜひ登録して、皆でもっと手をつないでやろう」というのが私からのメッセージです。ネットワークが首都圏に多いのは人口分布から当然ですが、地域こそネットワークが必要であると思います（図5）。

北海道	3
東北	6
関東	36
中部	8
関西	14
中国	3
四国	2
九州・沖縄	9
全国	14
合計	95箇所

図5 日本のシニアネット

## 9. 日本のシニアネットのスタイル

100くらいある日本のシニアネットを次の三つのレベルで分類しました（図6）。

- ①コミュニケーションレベル
- ②サービスレベル
- ③技術・企画・戦略レベル

### 日本のシニアネットのスタイル

コミュニケーションレベル  
 1. サロン型（穏やかな社交基盤）  
 2. 情報基地型（積極活動のベース）  
 3. オンラインコミュニティ型（談話・議論）

サービスレベル  
 4. 講習会運営型  
 5. Webによる公開情報発信型  
 7. MLによる非公開情報

技術・企画・戦略レベル  
 6. 連携・協働型  
 7. 技術力、企画力によるモノづくり型  
 8. 新規事業開拓とその目標達成型

図6 日本のシニアネットのスタイル

### (1) コミュニケーションレベル

コミュニケーションのレベルで言うと、まずサロン型シニアネットがあります。私も、徳島に来る前は京都工芸繊維大学にいて、そこで、初めて旧通産省プロジェクトのお力添えを得て、「金曜サロン」というシニアネットワークを作りました。日本のシニアネットのさきがけの一つに数えられるまでに成長し、喜ばしい成果が得られましたが、そこでの基本は皆で穏やかに集まり、皆で穏やかにコミュニケーションをして、楽しくやりましょ

うというもので、同時にインターネットやパソコン学習を行うというものでした。

これが多分、日本のシニアネットのモデルケースの中でもさらに代表になるのではないかと考えます。一番やり易いスタイルであり、新たにシニアネットを作る際にはこのサロン型を頭に入れておくとよいと思います。

ただ、アメリカ等の事例を見た時に、情報基地としてのシニアネットづくりが重要ではないかと思えます。何であれ積極的な活動をしてゆくための礎となるような情報基地的ネットがあり、そこでコミュニケーションが活性化されるという考え方です。

SOHOスタイルのシニアネットはこれに相当するのではないかと考えています。そこでのサロンの交流が、実はそのままビジネスのアイデアやヒントになる、あるいはそのためのヒューマンネットワークを芽づる式に構築出来る、これが本当の意味での情報基地型ではないかと思っています。

## (2) サービスレベル

サービスレベルの第1は、講習会運営型です。原義からいってシニアネットの基本となるもので、受講者の満足が行くフォーマルな講習会が出来る、そのための講師が確保できる、ということが基本になります。

それに加えて、WEBによる公開情報の発信、メーリングリストによる非公開情報の発信、このあたりがシニアネットモデルの軸の一つとなります。

## (3) 技術・企画・戦略レベル

最後に技術企画戦略レベルというレベルを作りました。私が情報技術の分野に在るということ、

またスタートアップ、ベンチャービジネスなどについても一部研究領域としていることにも関係しているかも知れませんが、新しいモノを作ってゆく力をどれだけ発揮できるか？ということもシニアネットに問われている課題です。そのことを既に実現できているシニアネットがいくつもあります。

モノというのは、ビジネスモデルであってもいい、地域振興の策であってもいい、ITへの入り口づくりのための講習会であってもいい、海外からのインターネットライブ中継作業をするというような、今までの形の中に位置づけられないようなことであっても良いわけです。

そのためには、まずは、連携共同して行くコラボレーションレベルから出発し、技術企画力に富んだものづくり型、新規事業開拓と、それを実際に行政とかを組み入れて運営してゆく戦略型、社会創生型へとステップアップして行くことです。

今日のこのフォーラムが実現できたことは、この松山が技術・企画・戦略レベルのことが出来ていることの証です。

## 10. シニア情報生活アドバイザー

このように、シニアネットの活動を行う上で、私達の周りの環境整備がととのってきました。国の政策、自治体行政の活動に、シニアネットが協力をしていく。これによって、最初にお話しをしたサンフランシスコのNPOのように、街づくりを実際に手がけてゆく立場に、イニシャティブをとってゆくことがあってもいいだろうと思います。

この実現に向かって機能しているのが、冒頭に

## シニア情報生活アドバイザー制度の 資格認定と活動支援の仕組み

養成講座を養成講座実施団体(協力団体)が実施

※協力団体はニューメディア開発協会が認定

※受講資格：概ね50歳以上

・パソコンを利用して電子メールの送受信を日常的に行っている人が対象

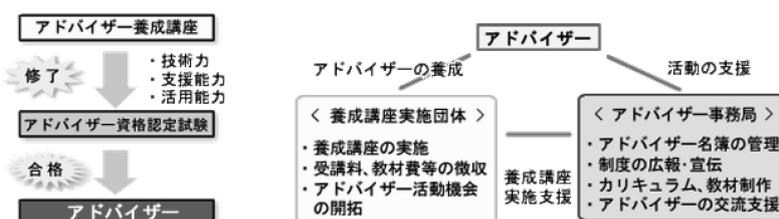


図7 シニア情報生活アドバイザー制度

も紹介のありました2100人以上のシニア情報生活アドバイザーの皆様です。シニア情報生活アドバイザー制度を簡単に紹介しますと、アドバイザーを養成すること自体がまず目的に含まれていて、養成されたアドバイザーは地域に入り、生き生きとした生活づくりに関与してゆく、そして豊かな高齢化社会実現に貢献してゆくわけです(図7)。

ですから、シニア情報生活アドバイザー養成講座では、単にパソコンやインターネットの使い方を覚えるだけではありません。技術力・支援能力・活用能力というトータルな能力を養い、そのことから一つのステップアップを図ることが出来ます。

アドバイザーになったときに、何をするのかという質問もあります。アドバイザーの活躍の場を作ることが、養成講座を担当した団体の仕事でもあります。育てた人の仕事を作ってゆくことがこの制度の最大のポイントであり、面白いところです。皆で新しい仕事を作る、それが講習会であったりITの新しいイベントであったりするわけですが、これをシニア情報生活アドバイザーが中心になって進めてゆくことです。何をするのかでなく、何を作るかであってそのために、行政側と一緒にやってゆくことです。シニア情報生活アドバイザーの資格認定は、何かを生み出す力を地域が持つということに他なりません。

ブログを利用して、今までのホームページとは違った情報発信が出来る時代になってきました。総務省の調査では、現在の335万人から2007年には782万人以上がブログをやる見込みです。こういう状況の中で、シニア情報生活アドバイザー制度も新しいことを取り入れて行く必要があります。

私もやっと、シニア情報生活アドバイザーの認定証をいただきました。私の目標はサーバーを地域に提供して、(実は、生き生きネットとくしまのサーバーは自分の家にあり、これを東京にいる教養子と二人で管理しているのですが)、これをボランティアとして運営していくことです。ライフワークになればと考えています。

## 11. 終わりに

### (1) ユビキタス時代に対応したシニアネットへ

さて、そろそろ時間がきました。シニアネットのこれからを考えると、以下のようなことを進めてゆきたいと思います。

- ・皆に、本当に優しいパソコン、インターネット環境を皆の力で作ろう。
- ・ネット間の連携を更に強化しよう。
- ・皆が活躍できる舞台をみんなで作って行こう。
- ・もっと技術力・もっと応用力に富んだシニアネ

ットを一つでも多く育てよう。

- ・もっと劇的に、スピーディに瞬発力・決断力・実行力のあるシニアネットにしよう。
- ・一方で、もっとゆっくりしたシニアネットもつくり、自分のペースでやってゆける、優しいシニアライフ支援もやろう。

### (2) シニアネットの体制整備への提案

ここでいくつかの提案をしたいと思います。これからシニアネットを作ろうとする人はこれまでのお話しをベースにして、他方、既にこれまでやってこられたところは、(1)に述べたような使命を担い、目標をたてて進めていただきたいと思います。

#### ①シニアネットの教科書づくり

目標を実現する対策として、シニアネットの教科書を作りたいと考えています。この会に参加するときにあらかじめ読んでおくと、いろいろなお話しや議論がもっとよく分かる、各老舗のシニアネットの思い出などを入れて、シニアネット関連の出版を推進したいと言うことです。年2回のフォーラムがあると年2冊出版することができ、その活動がシニアネット全集などに編集できます。

#### ②シニアネットの情報化推進

次はシニアネットの情報化をより進めたいと思います。そのために、未登録のシニアネットは登録を積極的にして欲しい。ご近所のシニアネットを紹介し、そして日本中のシニアネットを総ざらいしようではないかと言うことです。そのためには皆様の力が必要です。シニアネットの成長・活動の様子をクローズアップし、苦勞しているところは励ますような仕組みにしたいと考えています。

#### ③シニアネットの組織化

最後の提案は、シニアネットの組織化です。シニアネット協議会、シニアネット連合会の様なものを作りたいという提案です。それぞれのシニアネットの思い、誕生のいきさつはあるでしょうが、シニアネットの成果を挙げてゆくには、連絡協議会的なもの、シニアネットセンターなどが必要ではないかと思っています。

サンフランシスコで誕生したアメリカのシニアネット20周年という現在、この松山の地でシニアネットフォーラムが開催されたことは記念すべきことであり、今回のフォーラムが次の段階に繋がるような形に持ってゆくということで提案をさせていただきました。

ご静聴を有り難うございました。

(文責：シニア情報生活アドバイザー事務局)